様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月　8 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０４３９
研究課題名（和文）　ストーリーを語る談話・文章における日本語らしさについての研究

研究課題名（英文）　Study on native-like characteristics of Japanese written and spoken narrative discourse

研究代表者
渡辺　文生（WATANABE FUMIO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：００２１２３２４

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語母語話者によるストーリーを語る談話（話しことば）と文章（書きことば）における表現、具体的には、同一話者による節単位のくりかえし、「その～・この～」など連体詞として使われる指示詞、「～てくれる・てもらう・てやる」などの視点を表す表現、「～のだ・～てしまう」などの文末表現を取り上げ、それらの使われ方の特徴を、英語話者、中国語話者、韓国語話者など日本語学習者による日本語の談話・文章と対照しながら分析を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated the usage characteristics of Japanese expressions. These include clausal self-repetition; pre-nominal demonstratives, such as *sono* N / *kono* N; perspective expressions, such as *te kureru* / *te morau* / *te yaru*; and sentence final expressions, such as *no da* / *te simau*. These expressions occurred in the written and spoken narrative discourse of both Japanese native and non-native speakers (English, Chinese, Korean). The usage of the expressions was compared across the 2 groups.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：対照言語研究，談話分析

１．研究開始当初の背景

語りの談話・文章とは、Labov(1972)によるナラティブ(narrative)の定義、および佐久間・杉戸・半澤(1997)による談話の定義をもとに、「過去の経験を時間的・空間的連続体として、その流れに沿って再現するために実現された話しことばおよび書きことばによることばのまとまり」であると定義する。

語りの談話・文章は、勧誘や依頼の談話・文章のように参加者の未来の行動に関わるものではなく、語り手の過去の経験を情報・知識として聞き手・読み手に伝えるものであ

る。勧誘や依頼では対人的なストラテジーが重要になるが（ザトラウスキー 1993)、語りの場合は伝えるべき情報や知識を分かりやすく言語化するためのストラテジーが必要となる。また、過去の経験の知識は、すべてがことばを通して得られるわけではなく、非言語的な情報をもとにした経験は、やはり非言語的な形で頭の中に蓄えられていると考えられる（Chafe 1980)。では、そのような経験の記憶を人はどのように言語化するのか、というのが語りの談話・文章（「物語」、「ナラティブ」などと呼ばれることもある）に関する研究の問題意識である。

同一人物が同一のストーリーを語るにしても、即時的に記憶を言語化しなければならない談話の場合と、言語化の過程に十分時間をかけられる文章の場合では、用いられる言語形式や談話・文章の構造なども違ってくる。本研究ではそのような日本語母語話者によるストーリーの言語化に関する特徴の記述が目的の一つとなる。

非母語話者、特に大学で学ぶ留学生にとってアカデミック・リテラシーの獲得は重要な課題であり、その際、事実と意見の区別が最も強調される。アカデミックな言説の論拠となる事実には、調査結果や参考文献からの引用だけでなく、歴史的な事態の推移や場合によっては個人的な体験など、複数の出来事が時系列に並ぶ内容を持った、つまりストーリー性を持ったものもありうる。

ストーリー性持った内容をことばで伝えようとするとき、日本語母語話者はどのような表現を用いてどのように談話・文章を構成しているのか、そしてそれは非母語話者による場合とどのような点で異なるかに関する知見は、大学の学部レベルでのアカデミック・リテラシー教育にとって重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、

(1)日本語母語話者によるストーリーを語る談話（話しことば）と文章（書きことば）を分析しその談話展開の特徴を明らかにし、

(2)同じストーリーを非母語話者がそれぞれの母語および日本語で語る談話と文章と対照することにより、

(3)非母語話者に対してストーリーを持った内容を話したり書いたりする指導のための方略を探ることである。

その目的の遂行のために、日本語母語話者および非母語話者をインフォーマントにした談話・文章データの収集とその分析を行う。具体的な分析項目は、同一話者による節単位のくりかえし、「その～・この～」など連体詞として使われる指示詞、「～てくれる・てもらう・てやる」などの視点を表す表現、「～のだ・～てしまう」などの文末表現である

３．研究の方法

(1) 日本語母語話者による談話・文章のデータ収集

語り手役のインフォーマントに約５分間のアニメーションを３回見せ、その後そのストーリーをアニメーションを見ていない聞き手役のインフォーマントに説明してもらう。その説明の模様をビデオカメラで撮影・録音する。その後、そのストーリーを語り手役・聞き手役のインフォーマントそれぞれに作文として書いてもらう。

(2) 英語・韓国語・中国語を母語とするインフォーマントによるデータ収集

日本語母語話者の場合と同様の方法で談話・文章データを収集する。

(3)談話・文章データのデータベース化

談話データの文字化を行い、コンピュータに入力する。データを区切る単位には、節を用いる。

(4)データの分析

母語話者による談話データと文章データの分析を通して、それぞれの展開の仕方を支える形式の使われ方について明らかにする。また、非母語話者のデータに現れるそれらの形式の使われ方についても分析を行う。

具体的な分析対象は、以下の通りである。

①同一話者による節あるいは単文レベルのくりかえし

②ストーリーに現れる人物やモノを指し示す名詞句に連体詞として前接する指示詞「その～・～この」

③ストーリーの中で利益のやり取りが認められる出来事の記述における、受け身文や「～てくれる・てもらう・てやる」などの受益表現

④出来事に対する主観的態度を表す文末表現としての「～のだ・～てしまう」

４．研究成果

(1)節のくりかえしについて

「…（凧の）糸が切れちゃったのね、んで切れたから…」のような、同一話者による節あるいは単文レベルの反復を節のくりかえしと呼ぶ。節のくりかえしにおいては、くりかえされる命題がその談話の中で有標性を持った出来事であり、それを焦点化するために先行する節において統語的な境界が設けられるが、その出来事が次の展開の背景として働いているためにくりかえしが生じると言える（渡辺 2007)。

本研究では、さらに、母語話者の談話データにおいてこのくりかえしをともなって述べられた出来事が文章データでどのように

現れるのか、節のくりかえしが持つ談話機能との関連において分析した。その結果、①節のくりかえしが起こった出来事は、同一話者による作文においても省略されずに残存しており、これは節のくりかえしが有標性のある出来事に起こるという機能に関する説明を補強すること、②節のくりかえしは、くりかえされる命題のタイプにより後続の文脈との関係や作文に書かれたときの現れ方に違いが生じ、特に、登場物に関する出来事か登場人物による意志的な行為かという違いがその類型に関わる大きな要因になっているということが分かった。

(2)連体詞として使われる指示詞について

指示詞については、庵（2007）が指示詞の結束的な使用の説明原理として用いた「トピックとの関連性」「テキスト的意味の付与」という概念の有効性について考察することをとおして、「この」と「その」の使われ方を分析した。

母語話者のデータにおいて、「この」の用例は談話データのみで用例数も少なかった（15 名のインフォーマントの談話において 7 例のみ)。「その」の用例は、「この」に比べて圧倒的に用例数が多く (15 名のインフォーマントの談話において 74 例)、「その」の方が無標の指示詞であったと判断される。庵(2007)が指摘する「この」や「その」の特徴付けとの関連では、「この」における遠距離照応の用例、「その」の用例に見られる「テキスト的意味の付与」など、一致する部分もあったが、「この」の用例に言い換えが起きている例がなかった点など、一致しない部分もあった。これらの違いから、時系列に沿った出来事を記述するという語りの談話・文章の特徴が示唆された。

(3)視点を表す表現について

ストーリーの中で依頼行為が行われている場面を取り上げ、作文データおよび談話データの中で、その《依頼内容》と依頼された《相手の反応》を表す出来事の記述に、受け身文や「～てくれる・てもらう・てやる」などの受益表現どのように使われているかを分析した。

その結果、日本語母語話者は 60～80%の頻度でこれらの視点の表現を用い、その高い頻度の傾向は談話データよりも文章データにおいて強く現れていた。また、視点の表現の使用が少ない（または、使用がない）非母語話者の談話を聞いた場合でも、それを作文として再現するときには、アニメーションを見たインフォーマントと同様な傾向をもって視点を表す表現を使用していた。

非母語話者の日本語の場合は、それぞれの母語に関わらず、《相手の反応》よりも《依頼内容》の記述においてより多く視点を表す表現を使用していた。特に依頼者の依頼の発話を（直接）引用する形で使われているものが多かった。ここから、会話相手とのやり取りの発話の中で「～してもらえませんか」「～してくれませんか」などと視点の表現を使うことは訓練されているが、発話内容の記述ではなく行為や出来事の記述の中で視点の表現を使うことには慣れていないという非母語話者の傾向が明らかになった。

(4)「～のだ・～てしまう」について

「のだ」については、母語話者の談話データにおける文末形を持つ発話のうち「のだ」が高い頻度で使用されていたが、文章データにおいて文末の「のだ」はごく低い頻度でしか使用されていなかった。非母語話者による「のだ」の使用は、インフォーマントによる偏りが大きく、非用の傾向が見られた。

「てしまう」については、語りのモードでの発話において、母語話者の談話データでは「てしまう」「ちゃった」だけでは文を終了させにくいという傾向が見られたのに対し、非母語話者のデータでは「てしまう」「ちゃった」で文を終了させている例が多かった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①<u>渡辺文生</u>、語りの談話・文章における文末表現について　-「のだ」と「てしまう」-、言語学と日本語教育、査読有、6 巻、2010、123-140

②<u>渡辺文生</u>、英語および日本語の語りの談話・文章における指示詞、山形大学人文学部研究年報、査読有、6 号、2009、1-13

③<u>渡辺文生</u>、日本語の談話におけるくりかえしとジェスチャーについて、言語学と日本語教育、査読有、５巻、2007、231-243

〔学会発表〕（計８件）

①<u>渡辺文生</u>、An analysis of expressions of viewpoint in narrative writing、 ATJ 2010 Annual Conference（Association of Teachers of Japanese)、2010 年 3 月 25 日、フィラデルフィア・アメリカ

②<u>渡辺文生</u>、An analysis of non-deictic use of demonstratives in narrative discourse、ATJ 2009 Seminar（Association of Teachers of Japanese)、2009 年 3 月 26 日、シカゴ・アメリカ

③<u>渡辺文生</u>、英語および日本語の語りの談話・文章における指示詞、日本語文法学会

第９回大会、2008 年 10 月 19 日、甲南大学

④渡辺文生・楊蔭、ストーリーを語る作文における視点の表現と談話展開について、日本語教育世界大会 2008、2008 年 7 月 13 日、釜山外国語大学・大韓民国

⑤渡辺文生、The use of "*no da*" in spoken and written discourse by native and non-native speakers、2008 年 4 月 3 日、ATJ 2008 Seminar（Association of Teachers of Japanese）、アトランタ・アメリカ

⑥渡辺文生、語りの談話・文章における評価表現の使われ方について、第 6 回日本語実用言語学国際学会、2008 年 3 月 1 日、サンフランシスコ州立大学・アメリカ

⑦渡辺文生、語りの会話で節のくりかえしが起きた出来事は作文でどう書かれるのか、日本語文法学会第８回大会、2007 年 10 月 28 日、筑波大学

⑧渡辺文生、Syntactic and semantic relations created by clausal self-repetition in Japanese animation narratives、第 10 回国際語用論会議、2007 年 7 月 10 日、ヨーテボリ大学・スウェーデン

６．研究組織

(1)研究代表者

渡辺　文生（WATANABE FUMIO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：００２１２３２４